

大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ

A psychological approach to the anxiety of university students

田 中 存 ・ 菅 千 索
 Tamotsu TANAKA Sensaku SUGA
 (教育学研究科14期生) (心理学教室)

2006年9月28日受理

はじめに

近年スチューデント・アパシー (student apathy) という言葉に接することがある。また現在、我が国の大学生の一部はスチューデント・アパシーに陥っているともしられている。もともとアパシーというのは、精神または脳気質の疾患に起因する無感情あるいは感情鈍麻の症状を指し、具体的には「物事に関心がない」「生きていく気力がいない」「何にも楽しみを見いだせない」といった状態をいう。そしてスチューデント・アパシーという用語は、Walters (1961) が著書『学生の諸問題』の中で従来のアパシーとは区別して「男性性確立に葛藤を持ち、予測される敗北や失敗を恐れ、学業における競争を回避しようとする反応」として提唱されたことに始まっている。我が国では、笠原・岡本 (1975) がWalters (1961) の翻訳を発表し、それによって我が国にスチューデント・アパシー (退却神経症ともいう) という名称が定着したとされている。スチューデント・アパシーに陥ると、無気力状態になり、生きがいや目標などが感じられなくなってくる。そして不安や焦りなどの感情が押さえ込まれるため、表面上は悩みなど持っていないように見える。その中には自覚している人もいると思われるが、多くの人は自覚していないであろう。そのためスチューデント・アパシーは深刻な問題である。一方、無気力や無関心が学業面にだけみられ、それ以外のクラブ (サークル) 活動やアルバイトなどは普通に行っている場合は、単なる怠惰または「怠け者」とみなされることも少なくない。

また近年、大学生生活において不適応を起こす学生が深刻な問題となっている。不適応の原因として、不本意入学、大学になじむことができない、講義が面白くないなどの理由が挙げられる。文部科学省の調査によると、大学または短期大学への進学率は50%を超えている (2005)。進学を希望する学生は皆、進学できる時代となってきているのである。だからといって、全ての人が希望しているところへ進学できるわけではない。むしろ、入りたい学校に入学できない不本意入学者は多数いると考えてよいであろう。不登校・登校拒

否も学校不適応の1つである。小柳 (2001) によると、不登校大学生の出現率は1.2~2.0% (男子1.10%、女子0.52%) と推測されている。学生は進学を希望し、大学へ入学してきているにも関わらず、この数値は高く、不登校傾向にある学生はさらに多いと考えられる。文部科学省の調査によれば、不登校となった直接的なきっかけとして、「学校生活に起因するもの」と「本人の問題に起因するもの」が大半を占めている。それぞれに含まれる事項を見ると、「本人に関わる問題」や「友人関係をめぐる問題」が多い。また、不登校の要因や背景としては、「不安など情緒的混乱」と「複合」と「無気力」が大半を占めている。不適応には性格特性などの本人に関する問題、友人関係などの対人関係が重要な役割を果たすといえ、その要因には不安が関わっていると考えられる。学生が抱える不安について調査し、その要因を考えていくことは、大学不適応や不登校、登校拒否など教育現場の深刻な問題にアプローチする重要な手がかりになるであろう。

不安は心理学の誕生当初から現在に至るまで一貫して、基礎領域から応用領域における研究対象であり続けてきた。本来不安は、生理反応次元、行動次元および主観的評価次元から測定することができる。不安を測定する場合、皮膚電気反射 (GSR) や回避行動、行動抑制などが指標として扱われることが多い。また、人の不安に関して主観的な側面に注目する場合には、質問紙を用いて多面的に評定する方法も重要である。質問紙法による不安尺度の代表的なものには、Taylor (1953) の顕現性不安を測定するMAS (Manifest Anxiety Scale) やSpielberger, Goursh & Lushene (1970) の状態不安・特性不安を測定するSTAI (State-Trait Anxiety Inventory) がある。大学生を対象とした不安尺度には、清水・今栄 (1981) のSTAI大学生用や藤井 (1998) の大学生生活不安尺度などがあり、これらを用いた研究も数多く行われている。西里 (1960) はMASの因子分析を行い、一般因子・内向性不安・外向性不安・劣等感の4因子を抽出している。萩生田 (1995) は不安尺度作成の過程で、心気症・神経質・社会的内向性・劣等感・強迫症・疑い深さ・恐れの状態

度・情緒不安定・易怒性・同調性の10因子を抽出している。一方、Salano & Koester (1989) は「社会的スキル」の欠如とは別に、自己の「社会的スキル」の程度に関する不安を検討しているし、また Arkowitz, Hinton, Perl & Himadi (1978) は「社会的スキル」と不安の関連を扱っており、その中で「他人に対する応答に自分が満足していないことが対人不安を引き起こす」と主張している。Leary (1983) は自己呈示が対人不安に影響を与えていると指摘している。諸井 (1997) は女子青年に対して、セルフ・モニタリングと対人不安との関係について、負の相関が見られることを示した。さらに、対人不安が聴衆不安・自己呈示不安・視線恐怖・対人技能不安の4側面からなることも指摘している。

本研究では大学生を対象として、不安に影響を与えている要因について検討していくことを目的とする。大学生の抱く不安には、学校生活の中で抱く不安と大学以外の日常生活の中で抱く不安とが考えられる。そのため、大学生活で抱く不安のみならず日常生活で抱く不安も含め、不安について考えてみたい。そして、不安に影響を与えている要因を生活状況・性格特性・対人関係の3方向から検討していく。

また、現在の大学生がどのような不安をどれほど抱え生活しているかにも着目し、大学生が不安を抱えることにより、その人の大学生活にどのような影響が与えられているのかについても調べてみたい。

方 法

被験者：和歌山大学教育学部の学生196名(男子101名、女子95名)で、その平均年齢は20.6歳であった。学年別では1回生45名(男子22名、女子23名)、2回生47名(男子27名、女子20名)、3回生59名(男子31名、女子28名)、4回生45名(男子21名、女子24名)。また調査に先だって回答させた結果からは、「自宅生」118名、「下宿生」78名、および「クラブ(サークル)活動をしている」126名、「同していない」70名であった。

質問紙：以下に示す4種類について評定させた。

①**大学生活不安尺度** 藤井(1998)が作成したものを使用した。この尺度は、大学生において特徴的に認められる不安感の程度を測定するものであり、「日常生活不安」13項目、「評価不安」11項目、「大学不適応」5項目の計29項目で構成されている。回答は大学生活について「はい(1点)」「いいえ(0点)」の2件法で求めた。

藤井(1998)によれば、信頼性係数(α)が尺度全体で.84、下位尺度ごとでは「日常生活不安」尺度.75、「評価不安」尺度.87、「大学不適応」尺度.83といずれも比較的高い値が示されている。妥当性に関しては、

大学生からの自由記述の調査、心理学関係の研究者による項目の検討、CMI健康調査票・日本版MAS・青年版TAIとの関連が検討されており、納得のいく妥当性が得られているとされている。そこで本研究では、これらの因子を下位尺度として、そのまま使用することにした。

②**性格特性尺度** Y-G性格検査からつぎの3つの下位尺度を引用した。尺度項目は「社会的外向」尺度10項目、「神経質」尺度10項目、「抑うつ性」尺度10項目の計30項目。評定方法および採点方法は標準化されているものと同様で行った。

③**社会的スキル尺度** 菊池(1988)の作成したKiss-18を使用した。これはGoldstein, Sprafkin, Gershaw & Klein(1986)の作成した社会的スキル尺度をもとにして作成されたものである。Kiss-18には「初歩的なスキル」「高度なスキル」「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」「ストレスを処理するスキル」「計画のスキル」という6つの社会的スキルが含まれており、全体は18項目で構成されている。回答は対人関係について「そうだ(5点)」「たいていそうだ(4点)」「どちらともいえない(3点)」「たいていそうでない(2点)」「そうでない(1点)」の5段階で求めた。

菊池(1988)によれば再テスト法での相関係数が、4ヶ月間隔で.73、8ヶ月間隔で.59と比較的高い値が示されている。さらに妥当性に関しては、Y-G性格検査や感情表出性コミュニケーションテスト(大坊、1991)を用い、対人的適応の指標と正の関連、不適応の指標と負の関連があることが示されている。また、Ito(1994)や相川(1998)の実験で用いられているものを行動指標とし、社会的スキル訓練を施したところ、本尺度の得点が上昇する傾向があることが示されている。

④**セルフ・モニタリング尺度** 岩淵・田中・中里(1982)の作成した尺度を使用した。この尺度はSnyder(1974)のセルフ・モニタリング尺度の日本語版であり、「外向性」尺度10項目、「他者志向性」尺度12項目、「演技性」尺度4項目からなる計25項目で構成されている。本研究では、セルフ・モニタリング尺度の「他者志向性」尺度と「演技性」尺度だけを使用した(「外向性」尺度については、Y-G性格検査のものを使用)。回答は対人関係について「そう思う(5点)」「ややそう思う(4点)」「どちらともいえない(3点)」「あまりそう思わない(2点)」「そう思わない(1点)」の5段階で求めた。

岩淵・田中・中里(1982)によれば、信頼性係数(α)が尺度全体で.78、下位尺度ごとでは「外向性」尺度.78、「他者志向性」尺度.72、「演技性」尺度.65という値が示されている。さらに妥当性に関しては、本尺度で得られた3因子の相互の相関や、自己意識尺度、対人不安尺度、自尊尺度、外向性尺度との相関を検討してい

表1 不安尺度の平均値(上段)と標準偏差(下段斜体)

尺 度	全 体	性 別		通 学		クラブ活動をして		学 年			
		男子	女子	自宅	下宿	いる	いない	1回生	2回生	3回生	4回生
大学生生活不安尺度	11.35	11.40	11.29	11.41	11.26	11.28	11.50	12.16	12.23	10.75	10.40
	<i>5.84</i>	<i>6.05</i>	<i>5.64</i>	<i>5.95</i>	<i>5.71</i>	<i>5.39</i>	<i>6.63</i>	<i>6.48</i>	<i>5.10</i>	<i>6.00</i>	<i>5.62</i>
日常生活不安	5.39	5.45	5.33	5.42	5.33	5.40	5.41	5.73	5.68	5.03	5.22
	<i>2.89</i>	<i>2.94</i>	<i>2.86</i>	<i>3.00</i>	<i>2.74</i>	<i>2.70</i>	<i>3.22</i>	<i>3.11</i>	<i>2.55</i>	<i>2.86</i>	<i>3.03</i>
評価不安	5.11	4.90	5.26	5.13	5.09	5.10	5.13	5.20	5.72	4.81	4.78
	<i>2.84</i>	<i>2.90</i>	<i>2.78</i>	<i>2.82</i>	<i>2.87</i>	<i>2.70</i>	<i>3.11</i>	<i>2.97</i>	<i>2.64</i>	<i>2.93</i>	<i>2.75</i>
大学不適応	0.85	0.98	0.71	0.86	0.83	0.79	0.96	1.22	0.83	0.92	0.40
	<i>1.38</i>	<i>1.48</i>	<i>1.27</i>	<i>1.47</i>	<i>1.25</i>	<i>1.32</i>	<i>1.50</i>	<i>1.69</i>	<i>1.27</i>	<i>1.45</i>	<i>0.89</i>

る。その結果、公的自己意識および外向性と正の相関が、また対人不安と負の相関がそれぞれみられるなど、理論的な予測と一致する結果を得ているという。そこで本研究では、2つの因子を下位尺度として、そのまま使用することにした。

手続き：まず最初にフェースシートで学年、年齢、性別、「自宅生・下宿生」、「クラブ(サークル)活動のしている・いない」を記入してから(無記名方式)、4つの尺度すべてに評定させた。『記入の際はあまり深く考えず、ありのまま答える』よう教示を与えた。所要時間は10分から15分程度であった。

結 果

大学生生活不安尺度の平均値：総括的な上位尺度である「大学生生活不安尺度」(分布可能範囲0~29)と下位尺度である「日常生活不安」(同0~13)、「評価不安」(同0~11)、「大学不適応」(同0~5)の全体および各群ごとの平均値と標準偏差を表1に示す。各群間の平均値の差の有意性を検定するために、2群からなる男子・女子、自宅生・下宿生、クラブ(サークル)活動の有・無についてはt検定を行ったが、いずれも危険率は10%以上で有意でなかった。確かに表1をみると、平均値の差に比べて標準偏差が大きくなっている。つぎに4群の比較となる学年差については、まず最初に分散分析を行ったところ、「大学不適応」についてのみ有意な主効果(5%未満)が認められたため(表2)、事後検定としての多重比較を行った(表3)。その結果、1回生と4回生の間においてのみ有意な差(5%未満)が認められた(図1参照)。有意差が認められたのは、この部分だけであったが、全体の傾向としては、学年が上がるにつれて一般に不安は低下していく方向にあることが示唆されている。

不安相互間の相関係数：「大学生生活不安尺度」「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」の相関行列を表4に示す。「大学生生活不安尺度」は下位尺度のなかで「日

表2 大学不適応の学年間の分散分析表

Source	SS	df	MS	F	p
主効果	15.62	3	5.21	2.79	0.042
誤差	357.79	192	1.86		
全 体	373.41	195			

表3 大学不適応の学年間の多重比較

学年(I)	学年(J)	平均値差(I-J)	有意確率
1回生	2回生	0.39	0.51
	3回生	0.31	0.67
	4回生	0.82	0.02
2回生	1回生	-0.39	0.51
	3回生	-0.09	0.99
	4回生	0.43	0.43
3回生	1回生	-0.31	0.67
	2回生	0.09	0.99
	4回生	0.52	0.23
4回生	1回生	-0.82	0.02
	2回生	-0.43	0.43
	3回生	-0.52	0.23

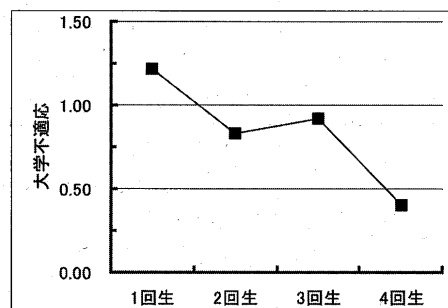


図1 大学不適応の学年別の平均値

常生活不安」と「評価不安」は十分高い相関が認められたが、「大学不適応」とはあまり高くなかった。さらに「大学不適応」と「日常生活不安」および「評価不安」との相関はかなり低い結果となっていた。それに

表4 不安相互間の相関係数

	I	II	III	IV
I. 大学生生活不安尺度	—	0.896	0.884	0.535
II. 日常生活不安	0.896	—	0.668	0.321
III. 評価不安	0.884	0.668	—	0.287
IV. 大学不適応	0.535	0.321	0.287	—

対して「日常生活不安」と「評価不安」の相関はある程度に高く、同じタイプの不安ではあるが少し意味合いが異なった不安を測定しているのではないかと判断される。

不安と関連変数の相関係数および重回帰分析：「大学生生活不安尺度」「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」と、性格特性(「社会的外向」「神経質」「抑うつ性」)、Kiss-18(「社会的スキル」)、セルフ・モニタリング尺度(「他者志向性」「演技性」)の相関係数を表5に示す。それによると不安は性格特性の「神経質」「抑うつ性」と相対的に高い相関があり、それに「社会的外向」と「社会的スキル」が続いていた。それに対してセルフ・モニタリング尺度との相関はいずれも低い値にとどまっていた。また、ここでも「大学不適応」は他の不安変数とは異なる傾向を示していた。

つぎに不安に関する4指標を目的変数(従属変数)、性格特性、Kiss-18、セルフ・モニタリング尺度を説明変数(独立変数)とする重回帰分析をステップ・ワイズ法で行った結果を表6に示す。まず重相関係数に注目すると、すべて0.1%水準で有意であり「大学不適応」を除いて比較的高い値を示していた。有意な標準偏回帰については、単相関係数(表5)と同じような傾向

にあり、性格特性の「神経質」と「抑うつ性」が回帰によく寄与していた。

考 察

我が国の大学生の一部はスチューデント・アパシーに陥っているといわれている。スチューデント・アパシーに陥ると、不安や焦りなどの感情が押さえ込まれるため、表面上には悩みなど持っていないように見える。実際、大学生に対しては、自由奔放で遊びやアルバイトに精を出しているイメージがある。では、大学生はどの程度不安を抱えているのだろうかという問題意識から、質問紙法による調査を行った。その結果、多くの学生が日常生活や他人からの評価に対する不安を抱いていたが、その多くは大学に対して不適応を示していなかった。逆に「大学不適応」で高い値を示している学生の約80%は「日常生活不安」「評価不安」の両方もしくは片方で高い値を示していた。

「大学生生活不安尺度」と下位尺度である「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」について、「男・女」、「自宅生・下宿生」、「クラブ(サークル)活動をしている・いない」、においてt検定を行ったが、すべてで有意な差が認められなかった。性別では、一般に女性の方が男性よりも不安を抱くことが多いと考えられたが、本研究では必ずしもそういう結果は得られなかった。大学生活での不安については、性別というカテゴリ分けをするよりも、大学生という全体で考えていくか、あるいは男女を問わない個体差とみなすべきだといえる。「自宅生・下宿生」の比較では、下宿生の方が身近に自分をサポートしてくれる存在が少なく、そ

表5 不安尺度と性格特性、Kiss-18、セルフ・モニタリングとの相関係数

不安尺度	性格特性			Kiss-18	セルフ・モニタリング	
	社会的外向	神経質	抑うつ性	社会的スキル	他者志向性	演技性
大学生生活不安尺度	-0.384**	0.573**	0.563**	-0.451**	0.119	-0.150*
日常生活不安	-0.341**	0.535**	0.495**	-0.420**	0.095	-0.085
評価不安	-0.305**	0.511**	0.500**	-0.428**	0.133	-0.231**
大学不適応	-0.283**	0.250**	0.318**	-0.136	0.028	0.015

df=194; *: $p < .05$, **: $p < .01$

表6 重相関係数と説明変数の有意な標準偏回帰係数

不安尺度	重相関係数	自由度調整済 重相関係数 2乗	性格特性			Kiss-18	セルフ・モニタリング	
			社会的 外向	神経質	抑うつ性	社会的 スキル	他者 志向性	演技性
大学生生活不安尺度	0.631***	0.389	—	0.287***	0.272***	-0.179**	—	—
日常生活不安	0.580***	0.326	—	0.310***	0.186*	-0.183**	—	—
評価不安	0.576***	0.321	—	0.289***	0.283***	—	—	-0.186**
大学不適応	0.370***	0.128	-0.199**	—	0.252***	—	—	—

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

の分だけ自宅者と比べて不安になりやすいと予測された。しかし、下宿生よりも自宅生の方が有意ではないがやや高い平均値を示していた。質問紙調査の時期が12月という遅い時期だったため、大学生生活や下宿生活に慣れてくるためには十分な時間だったのかもしれない。また下宿生にとっては、不安を抱くよりも開放感や自由感の方が大きいことも予想される。“クラブ(サークル)活動をしている・いない”では、クラブ(サークル)活動をしている学生は、していない学生と比べ、大学内でより幅広い友人関係や人間関係のつながりを持っており、大学に適應しやすいのではないかと思われたが、両者にも差は見られなかった。クラブ(サークル)活動をしていない人の方が人間関係の交流の場が少なく、不安を抱きやすいと考えていたが、必ずしもそうではないようである。不登校でありながらもアルバイトに精を出す学生もいるし、大学の開放感に影響され遊びに夢中になる学生もいる。そのような学生にとっては“クラブ(サークル)活動をしている・いない”はあまり関係のないことかもしれない。

続いて「大学生生活不安尺度」「日常生活不安」「評価不安」「大学不適應」をそれぞれ従属変数、学年(4群)を独立変数とするの1要因分散分析を行った。まず藤井(1998)の結果では、「大学生生活不安」「日常生活不安」「評価不安」それぞれに学年差が見られたが、「大学不適應」に対しては学年差は見られなかった。本研究においても藤井(1998)と同様の結果が得られると予測されたが、「大学生生活不安尺度」「日常生活不安」「評価不安」では学年差に見られず、「大学不適應」の学年にのみに差が見られただけであった。これらは藤井(1998)とはまったく逆の結果になっている点が注目されるが、その原因については明らかではないし、現時点で予想することも容易ではない。

「大学不適應」の分散分析で学年の主効果が有意であったため、多重比較を行ったところ、1回生と4回生との間にだけ有意な差が認められた。事前には学年が上がるにつれ不安が少なくなると予測され、1回生よりも2回生が、2回生よりも3回生が、3回生よりも4回生の方が、不安が少ないと考えられた。しかし多重比較によると「大学不適應」で1回生と4回生との間に有意差が見られた程度で、その他では有意な差には至っていなかった。その理由として質問紙調査を行った時期が考えられる。調査時期が12月だったので、1・2回生にとっては、テストも無く冬休み間近である。大学生活で最も不安を感じておらず、また、大学生活に慣れがでているのだろう。対して、4回生にとって12月は卒業論文の追い込みの時期へとさしかかり、大学で不安を抱えやすくなっている時期だったことが、予測していたよりも学年別に学生が抱く不安の量の差を縮めたのかもしれない。大学生活の不安を調べるには、時期も重要な要素であると考えられる。そし

て不安の推移を見るには、期間をあけ数回にわたり調査を行うことが望ましいであろう。

つぎに「大学生生活不安尺度」と下位尺度である「日常生活不安」・「評価不安」・「大学不適應」との相関を調べたところ、「大学生生活不安尺度」と「日常生活不安」および「評価不安」との間に非常に高い正の相関が見られた。すなわち日常生活と評価に対する不安が、大学生活における不安とかなり密接な関係があると考えられる。一方、「大学不適應」を感じている学生ほど「大学生生活不安」が高いと予想されたが、実際には相関係数はあまり高くなかった。その理由として考えられることは、「大学不適應」に対する質問項目が5項目と少ないこと、および、その質問内容が極端であったことが考えられる。

「大学生生活不安尺度」「日常生活不安」「評価不安」「大学不適應」と「社会的外向」「神経質」「抑うつ性」「社会的スキル」「他者志向性」「演技性」との相関を見ると、性格特性の「社会的外向」・「神経質」・「抑うつ性」と各不安の「大学生生活不安」・「日常生活不安」・「評価不安」・「大学不適應」との間に相関が認められた。その中で「大学不適應」に関しては、「神経質」・「抑うつ性」との間に相関が見られた。しかしながら、その相関は予測していたよりもはるかに低いものであった。

大学生の不安は何と関係しているか検討するために、「大学生生活不安尺度」を目的変数、性格特性である「社会的外向」「神経質」「抑うつ性」および対人関係に関する「社会的スキル」「他者志向性」「演技性」を説明変数とした重回帰分析を行った結果、「神経質」と「抑うつ性」が正の関係があり、「社会的スキル」とは負の関係があった。ステップ・ワイズ法での重回帰分析によると関係性が強い順に「神経質」>「抑うつ性」>「社会的スキル」であった。

さらに、「日常生活不安」「評価不安」「大学不適應」を目的変数とする重回帰分析(ステップ・ワイズ法)では、「日常生活不安」には「神経質」と「抑うつ性」が正の関係があり、「社会的スキル」とは負の関係があることが示された。とりわけ「神経質」と強い正の関係が認められている。また「評価不安」では「神経質」と「抑うつ性」が正の関係、「演技性」が負の関係がそれぞれ示された。さらに「大学不適應」は「抑うつ性」と正の関係、「社会的外向」と負の関係が認められた。分析結果を見ると、大学生活の不安には対人関係に関するものより性格特性の方が強い影響力をもっていると考えられる。特に「抑うつ性」は、全ての不安に対して強い影響を与えていると考えられる。また「神経質」も「大学不適應」を除く全ての不安に強い影響を与えているようである。「神経質」な学生ほど「大学不適應」を起こしやすいと予測されたが、そういう結果は得られなかった。これらを総合すると「抑うつ性」

と「神経質」は大学生活での不安を考える上で重要な要素だと予想される。

対人関係に関する項目として用いた「社会的スキル」「他者志向性」「演技性」については、「他者志向性」はどの不安ともあまり関係していないことが明らかになった。一方、「社会的スキル」は「日常生活不安」と、また「演技性」は「評価不安」との関係が認められた。「社会的スキル」が「評価不安」に影響を及ぼしているのではと予想されたが、そのような結果は本研究では得られなかった。「社会的スキル」とは他者からの評価を気にするため、社会的に望ましい態度をとるのではないかと予想は支持されなかったことになる。「社会的スキル」は他者との関係を意識しているものの、評価を得るために行う行動ではない可能性がある。自己呈示と対人不安との関係についての研究は数多くあり、両者の関係が深いことも指摘されているが、大学生活に関しては、自己呈示であるセルフ・モニタリングの因子として考えられる「社会的外向」「他者志向性」「演技性」は、それほど「大学生活不安尺度」と関係がないのかもしれない。

各不安尺度の項目について検討していくと、大学生の現状として、大学を4年間で卒業できるかどうかに関して、不安を抱えている学生が30%を下回っている状態であった。それに加え、留年に関する不安も30%を下回っていた。これは、留年をしてよいというイメージを持っているのか、または、自分は留年することはないというイメージを持っているのか2通り考えられる。一般に学生は評価不安に関する項目の、必修科目の成績の“不可”に対して高い不安を抱いており、その傾向は特に1・2回生で強い。また、単位が取れているかどうかの不安や卒業論文に対する不安も高い。これらから推測すると、単位は落とさたくなく、無難に4年間で卒業したいという意思が感じられる。また、留年や卒業に対する不安はほとんど持っておらず、無難に単位を修得していれば、学年が上がるにつれて単位や成績に対する関心が薄れてきているとも考えられる。その一方で、卒業に対する最後の関門である卒業論文については、特に4回生で不安が高くなると容易に予想される。これらから学生は留年することに対しての不安をそれほど持っていないが、卒業に関係している最も身近な問題に対しては、高い不安を抱えていると考えられる。また就職に関する不安では、大学生活の短い1・2回生の方が不安は高く、4回生になると就職に関する不安は少なかった。4回生が就職に対する不安が少ないことに関しては、12月ということと進路が決定している者が多数いるということが原因だと考えられる。それでも3回生と比べ1・2回生の方が就職に対して不安を抱えていることに関しては興味深い結果が得られた。

不安に関しては、大学生活の中での漠然としたもの

に対し多くの不安を抱えるが、単位習得や卒業に対しては、楽観的で甘えのある考えが出てくると考えられる。また、就職など現実的に進む道が見つかった時、不安を感じなくなると考えられる。

本研究では、大学生活で抱く不安に関しては、対人関係の影響よりも性格特性の影響の方が強いことが示された。また、不安の高い項目について見ると、大学生は対人関係でも高い不安を感じているという結果も得られている。そのため、今回とはまた別の角度での対人関係についても検討していく必要がある。性格特性面でも今回示された特性以外にも不安の要因になりうる特性が存在していることが考えられるので、それらの存在についても明らかにしていく必要がある。

本研究では、大学生活での不安にどのような要因が関係しているのかを明らかにすることを目的としていたが、その中には日常生活での不安も含まれており、求めたいものが幅広くなりすぎていたことが問題であったと思われる。そのため今後はより目的を絞っていく必要があると考えられる。

要 約

近年、学生の無気力・不登校などの学校不適応が問題となっている。大学生では不登校の出現率は1.2~2.0%と推測されている。不登校者を小学生から大学生まで含めるとさらに多い。そのきっかけには、本人に関わる問題や、対人関係に関わる問題が挙げられる。さらに、その要因には不安や情緒的なものが挙げられる。学生が抱える不安について調査し、その要因を考えていくことは、学校不適応や不登校、登校拒否など教育現場の深刻な問題にアプローチする重要な手がかりになると考えられる。そこで、本研究では大学生を対象とし、大学生活で抱く不安のみならず日常生活で抱く不安についても考えていく。そして、不安に影響を与えている要因を生活状況・性格特性・対人関係の3方向から、検討していくことを目的とし、和歌山大学教育学部の学生196名(男子101名、女子95名)に対して質問紙による調査を行った。

大学生活における不安としては「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」とその合計である「大学生活不安尺度」の4変数を用いた。また性格特性では、「社会的外向」「神経質」「抑うつ性」の3変数、対人関係では、「社会的スキル」「他者志向性」「演技性」の3変数を使用した。

学年と不安に関して分散分析を行った結果、「大学不適応」で、1回生と4回生の間に有意な差が見られた。「大学生活不安」に関しては、対人関係の影響よりも性格特性の影響の方がより強く関係していた。影響力の強い変数から順に、「神経質」>「抑うつ性」>「社会的スキル」であった。「大学生活不安尺度」の下位尺度

である「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」では、「日常生活不安」では「神経質」「抑うつ性」「社会的スキル」、また「評価不安」で「神経質」「抑うつ性」「演技性」、さらに「大学不適応」では「抑うつ性」「社会的外向」が強い影響を与えていた。「他者志向性」に関しては大学生生活の不安に、影響を与えていなかった。大学生生活で抱く不安に関しては、対人関係の影響よりも性格特性の影響の方が強いことが示された。また、不安の高い項目で、対人関係に高い不安を感じているという結果も得られている。

現在の大学生では個人差はあるものの、ほとんどの学生が不安を抱えている。特に日常生活における不安と評価に対する不安が高かった。しかし、それらの不安は大学生生活の中での漠然としたものに対し多くの不安を抱えるが、単位習得や卒業に対しては、楽観的で甘えのある考えが出てくると考えられる。また、就職など現実的に進む道が見つかった時、不安を感じなくなると考えられる。

本研究では、大学生生活での不安にどのような要因が関係しているのかを明らかにすることを目的としていたが、その中には日常生活での不安も含まれており、求めたいものが幅広くなりすぎていた。そのため、今後はより目的を絞っていく必要がある。

引用文献

- 相川充 1998 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, 14, 95-105.
- Arkowitz, H., Hinton, R., Perl, J., & Himadi, W. 1978 Treatment strategies for dating anxiety in college men based on real-life practice. The Counseling Psychologist, 7, 41-46.
- 大坊郁夫 1991 外見印象管理と社会的スキル 日本ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 115-116.
- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. 1986 The adolescent: social skill training through structured learning. In Cartledge, G., & Milburn, J. F. (Eds.), Teaching Social Skills to Children. Pergamon Press.
- 萩生田伸子 1995 不安尺度の構成とその妥当性の検証 心理学研究, 66, 16-23.
- Ito, T. 1994 An analysis of individual "rhythm" in face-to-face interaction. Japanese Psychological Research, 36, 74-82.
- 岩淵千秋・田中國夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 小柳春生 2001 ひきこもる小さな哲学者たちへ NHK出版
- Leary, M. R. 1983 Social anxiousness: The construct and its measurement. Journal of Personality Assessment, 47, 66-75.
- 諸井克英 1997 セルフ・モニタリングと対人不安尺度との関係

に及ぼす認知欲求の効果—女子青年の場合— 人文論集 (静岡大学人文学部), 48, 31-71.

- 西里静彦 1960 不安尺度に関する因子分析的研究 心理学研究, 31, 20-28.
- Salano, C. H., & Koester, N. H. 1989 Loneliness and communication problems: Subjective anxiety or objective skills? Personality and Social Psychology Bulletin, 15, 126-133.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348-353
- Snyder, M. 1974 The self-monitoring of expressive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
- Spielberger, C. D., Goursch, R., & Lushene, R 1970 Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. Consulting Psychologist Press, Palo Alto California
- Taylor, J. A. 1953 A personality scale of manifest anxiety. Journal of Abnormal and Social Psychology, 48, 285-290.
- Walters, P. A., Jr. 1961 Student Apathy. (笠原嘉・岡本重慶(訳) 1975 学生の諸問題 文光堂 106-120)

付 記

本論文は、菅の指導のもとで田中が行った卒業業績のための研究(卒業論文)をもとにして、菅が加筆・削除・変更・修正などにより完成させたものである。その際、特に『はじめに』と『考察』については「現役大学生」であった田中の問題認識を最大限に尊重することとした。

参考資料

大学生生活不安尺度 (はい・いいえ)

1. 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります
2. 4年間で卒業できるかどうか、不安です
3. 留年したらどうしようと、気になります
4. 万一事故に遭ったり、病気をしたらどうしようと心配になることがあります
5. 友達と一緒に何かをしなければならぬ時、うまく協力ができるか不安な気持ちになります
6. サークルで先輩たちとうまく付き合えるか心配です
7. 1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です
8. 先生が近くにいると気になって仕方ありません
9. 1か月の生活費が足りるかどうか、心配です
10. 授業中、先生の言っている内容が分からなくて、不安になることがあります
11. 大学の先生と話をする時、とても緊張します
12. 先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら、何を言われるかとても気になります
13. 将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です
14. 授業中に何かしなければならぬ時、へまをするのではないかと不安になることがあります
15. 必修科目の成績が“不可”だったらどうしようと心配になることがあります
16. テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとま

らなくなります

17. テストを受けていて、分からない問題に出会った時、頭の中が真っ白になってしまうことがあります
18. 成績のことが気になって仕方がありません
19. 大学の成績のことを考えると、憂鬱です
20. 申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか、心配です
21. テスト中、緊張して自分の力が発揮できません
22. 授業で発表する時、声が震えることがあります
23. 卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です
24. テストを受ける時、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります
25. こんな大学にいたら自分が駄目になるのではないかと、憂鬱な気分になることがあります
26. この大学にいて、何か不安な気持ちになります
27. できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がありません
28. 入学した学部が自分に合っていないような気がして、不安です
29. 大学を退学したいと思うことがあります

Kiss-18 (5段階評定)

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れない方です
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができます
3. 他人を助けることを、上手にやれます
4. 相手が怒っている時に、うまくなだめることができます
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められます
6. 周りの人たちとの間でトラブルが起きてても、それを上手に処理できます
7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できます
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できます
9. 仕事をする時に、何をどうやったら良いか決められます
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できます
11. 相手から非難された時にも、それをうまく片付けることができます
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることがで

きます

13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できます
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できます
15. 初対面の人に対し、自己紹介が上手にできます
16. 何か失敗した時に、すぐに謝ることができます
17. 周りの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっています
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方です

セルフ・モニタリング尺度 (5段階評定)

1. パーティーや集まりで、他の人が気に入るようなことを、言ったりしたりしようとはしない
2. あまり詳しく知らないトピックでも、即興のスピーチができる
3. 自分を印象付けたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある
4. いろんな場面でどう振舞っていいのかわからない時、他の人の行動を見てヒントにする
5. たぶん良い役者になれるだろう
6. 実際に以上に感動しているかのように振舞うことがある
7. 喜劇を見ている時、1人よりみんなと一緒にの方がよく笑う
8. グループの中で、めったに注目的にならない
9. 本当は楽しくなくても、楽しそうに振舞うことが良くある
10. 私は、常に見かけのままの人間というわけではない
11. 人を喜ばせたり、人に気に入ってもらおうとして、自分の意見や振舞い方を変えたりはしない
12. 自分はエンターテイナーであると思ったことがある
13. 仲良くやっていったり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ
14. 良かれと思えば、相手の目を見て、まじめな顔をしながら、嘘をつくことができる
15. 本当は嫌いな相手でも表面的にはうまく付き合っている

注：Y-G性格検査は商業ベースで市販されているため、だれでも容易に入手可能であり、また著作権に関する問題にも配慮して、ここでの記載は行わなかった。